親鸞聖人とその家族・子供達（最終回）

阿弥陀寺住職・宗教哲学者　宇野 弘之

宇野　弘之氏

親鸞聖人の生涯

親鸞聖人の御生涯は、四期に分けて考えると理解しやすいであろう。

第一期は、京都時代である。誕生、出家、比叡山における修行、そして29歳にして山を降り、諸人救済の法然上人の念仏道に帰依し、門弟として承元2（1207）年2月、専修念仏は禁止され、雪深き越後に御流罪となる。

第二期は、越後での7ヶ年の生活である。越後御流罪は、藤井善信として「僧に非ず俗に非らず」の愚禿の生活を為さり、師法然上人の念仏往生の教えを内省し、思索し、自問自答し、信仰の道を確立なさった時期ではなかろうか。

豪族三善家の息女、恵信尼を裏方に迎え、5年間の流罪の生活を越後でなされる。罪許されて師法然上人は京都へお帰りになったと、勅免の知らせはお聞きするが、間もなく師匠は遷化されね。念仏停止令の旧仏教側の弾圧が解除されていない。親鸞聖人は、恵信尼との間に子供も生まれ、更に2年間越後に御滞在なさる。ここまでが第2期の生活である。越後御流罪は、四期に分けて考えると理解しやすいであろう。

第一期は、京都時代である。誕生、出家、比叡山における修行、そして29歳にして山を降り、諸人救済の法然上人の念仏道に帰依し、門弟として承元2（1207）年2月、専修念仏は禁止され、雪深き越後に御流罪となる。ここまでが第2期の生活である。越後御流罪は、藤井善信として「僧に非ず俗に非らず」の愚禿の生活を為さり、師法然上人の念仏往生の教えを内省し、思索し、自問自答し、信仰の道を確立なさった時期ではなかろうか。

豪族三善家の息女、恵信尼を裏方に迎え、5年間の流罪の生活を越後でなされる。罪許されて師法然上人は京都へお帰りになったと、勅免の知らせはお聞きするが、間もなく師匠は遷化されね。念仏停止令の旧仏教側の弾圧が解除されていない。親鸞聖人は、恵信尼との間に子供も生まれ、更に2年間越後に御滞在なさる。ここまでが第2期の生活である。42歳から62、3歳まで伝道に力を注ぎ、門弟が37名、有力な信徒たちも含め、50人を超える門侶に恵まれる。その門弟たちはそれぞれ同行をかえていたと考えられる。20年間の伝道生活。収穫があろう。一番弟子の性信房に箱根まで見送られ、京都に親鸞聖人はお帰りになる。

第四期の京都での生活は専ら著作に専念し、多くの著述を残されている。やがて後継者たちに法灯が継承され、他力本願力開の見られる歴史的展開がなされ、以上の四期が考えられる。

聖人忠実についての誤説

親鸞聖人の家族とその子供達については今、前述した通りであるが現在の真宗史の論点は、いくつか問題の所在を提起している。

①聖人の妻帯はいつであったか。吉水時代に家庭を持ったであろうという説についてはいくつかの真偽である。法然上人は叡山下山後、西山広谷から東山吉水に移住してある。通説とされたとある（法然上人行状絵図36）。吉水は大谷の一部であるが現在の知恩院付近であろうか。齋藤専門跡、慈門の斡旋により東山に庵を構え、恵信尼と結婚されたとある。

しかし、この時に家庭を持たれたとよく語られる定説（御伝鈔上）によると1204年4月5日の寅の刻親鸞聖人は六角堂の観音より夢想のお告げを得られる。

②行者宿報設女犯　行者宿報にて設え女犯とも（そえたは前世より約束となる）

③我床玉女身被犯　我は玉女の身と成り犯せ被れ（そして）その妻には自分が命によって結婚されたという忠実についてはもちろん兼実公には玉姫には相当の間、能く壮厳（一生の間、立派に暮していって）

○臨終引導生極楽　臨終引導して極楽に生ぜしめむ（臨終には必ず導いて極楽に生まれしめる）

四句の偈である。

『伝絵』には「かの記」なるものが本明であるところから近代の宗史学者はこれを否定し、親鸞聖人の曾孫、覚恵の子、本願寺三世、編集如上人（1270～1351年）の創作であろうと疑った。ところが高田派本山専修寺の宝庫から『親鸞夢記』が発見され、それが親鸞聖人の高弟、高田の真仏上人を指すことがわかったのである。

真仏上人（1209～1258年）は、親鸞聖人86歳の時先立って没していることから、在世中、親鸞聖人が話されたのを書きとめておかれたものに違いない。これは「そなたは妻を持つであろう。その時は自分がその妻になる」との夢想は未来のこととなっている。従って建3年4月、親鸞聖人31歳の春は未だ結婚はしておられないことになる。玉日説は、建仁元（1201）年10月、聖人29歳の時のこととして伝えられていて、妻玉日説が有力である。

六角堂夢想事件（建仁3（1203）年）聖人31歳が検討された。『親鸞伝絵』（御伝鈔上）によると1204年4月5日の寅の刻親鸞聖人は六角堂の観音より夢想のお告げを得られる。

○行者宿報設女犯　行者宿報にて設え女犯とも（そえたは前世より約束となる）

○我床玉女身被犯　我は玉女の身と成り犯せ被れ（そして）その妻には自分が妻を持つであろう。

○一生之間能厳　一生之間能厳（一生の間、能く壮厳（一生の間、立派に暮していって）

○臨終引導生極楽　臨終引導して極楽に生ぜしめる（臨終には必ず導いて極楽に生まれしめる）

四句の偈である。

『伝絵』には「かの記」なるものが本明であるところから近代の宗史学者はこれを否定し、親鸞聖人の曾孫、覚恵の子、本願寺三世、編集如上人（1270～1351年）の創作であろうと疑った。ところが高田派本山専修寺の宝庫から『親鸞夢記』が発見され、それが親鸞聖人の高弟、高田の真仏上人を指すことがわかったのである。

真仏上人（1209～1258年）は、親鸞聖人86歳の時先立って没している。